

<第5学年部会>

指導助言者：富山視覚総合支援学校 教 頭 野原 秀年  
授 業 者：富山市立藤ノ木小学校 教 諭 中山 朋音

単元名 第5学年 総合的な学習の時間

「あったかスクラム作戦 ～みんなでつくる あったかタイム～」

(1) 研究協議題

児童の実態を適切に把握し、「つながり」（学級と子供、子供の願い・課題と授業、子供と子供）をもつための単元・授業の構想、支援はどうあればよいか。

(2) 協議内容（指導助言を含む）

- ・板書、写真、あったかメーター等の視覚的な支援は有効であった。子供が注目できるように大きさや見る時間を工夫したい。
- ・話合いで話題になった「会話」「自己紹介」をロールプレイすることで実感を伴う理解を促し、次の活動への意欲を高める。
- ・付箋を用いてのグループ相談タイムは視覚優位の子供にとって分かりやすかった。話合いの後に付箋の内容を見直してからグループ活動に入ると、話合いでの学びを生かすことができる。



(3) 研究の成果とこれからの方向（指導助言を含む）

- ・言葉だけでなく見て分かるように「見える化」することで学習プロセスが共有できた。
- ・特別支援学級担任との連携が交流級で学習する自信につながった。集団の中で役割をもつ、モデル（自分の目標となる友達）を発見するという交流級での経験が基礎的学力や社会性を育む。
- ・学習環境による支援はとても大切である。集団全体と個への手立て、物的支援と人的支援の特性を踏まえながら、子供の主体的な活動を促す手立てを行うことが大切である。

<第6学年部会>

指導助言者：西部教育事務所 指導主事 森谷 信久  
授 業 者：富山市立藤ノ木小学校 教 諭 滑川 寧

単元名 第6学年 社会科 「消費税から考える

～みんながつくるハッピースマイルな藤ノ木校区～」

(1) 研究協議題

児童の実態を適切に把握し、「つながり」（学級と子供、子供の願い・課題と授業、子供と子供）をもつための単元・授業の構想、支援はどうあればよいか。

(2) 協議内容（指導助言を含む）

- ・見通しがもてないと不安を示す子供は、事前に単元の終末までの見通しや授業の目的や流れを伝えることで落ち着いて学習ができた。また、調べ方の手順書を与え、自分の考えをもたせたり、授業では色付きの紙コップ等による意思表示をさせたりすることで、自己肯定感の低い子供が自信をもって学習に参加できた。
- ・子供にとっての新たな視点や悩み等の背景を教師が捉え、全体の課題として問うたり、図やグラフ等の考えが比較しやすい板書を工夫したりすることで主体的な学び合いが生まれた。



(3) 研究の成果とこれからの方向（指導助言を含む）

- ・子供が協働的に学習を進めるには、日頃から様々な価値観をもつ仲間と温かく関わり、周囲の仲間に対して信頼と安心感のある学級が基盤となっている。
- ・子供の日々の実態や学級の課題を基に単元を構想することで、子供は日常生活で抱いていた課題を乗り越えたり、仲間とのよりよい人間関係を築いたりしていこうとする。

＜特別支援学級部会＞

指導助言者：富山大学人間発達科学部附属特別支援学校 副校長 近江ひと美  
授業者：富山市立藤ノ木小学校 教諭 水上 靖子

活動名 自閉症・情緒障害特別支援学級 自立活動  
「 にこにこわくわくランドをつくろう ～みんな なかよし～」

(1) 研究協議題

一人一人の実態を適切に把握し、「つながり」（子供の願い・課題と授業、子供と子供）をもつための単元・授業の構想、個に応じた支援はどうあればよいか。



(2) 協議内容（指導助言を含む）

- ・5区画に分けたエリアを子供たちに与え活動の場を保証したことで子供たちは自分のイメージをのびのびと形に表した。この活動は子供たちのつながりを生む場の設定だったが、そのつながりがトラブルになる可能性をもっていることを踏まえることで場の設定に工夫の余地があった。

(3) 研究の成果とこれからの方向性（指導助言を含む）

- ・子供たちが好きな作る活動を仕組むことで、友達のよさを認めたり折り合いを付けたりすることを学ぶ機会となった。
- ・教師は、子供の行動から「なぜこの子は～したのか」という思いを見取る必要がある。活動の理解と見通しがあっても自分の思いや感情を抑えられない子供たちの視点に立つことが大切である。

＜通級指導教室部会＞

指導助言者：富山総合支援学校 教頭 北川 雅恵  
授業者：富山市立藤ノ木小学校 教諭 細川 雅仁

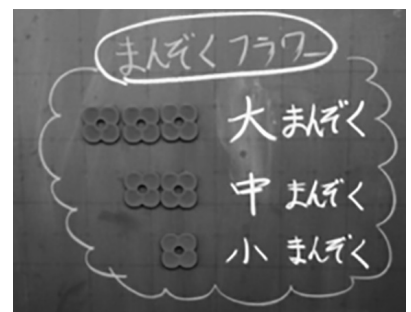
活動名 通級指導教室（学習障害） 自立活動 「 ㊦らすら読もう【㊦シリーズ】 」

(1) 研究協議題

一人一人の実態を適切に把握し、「つながり」（子供の願い・課題と授業、子供と子供）をもつための単元・授業の構想、個に応じた支援はどうあればよいか。

(2) 協議内容（指導助言を含む）

- ・多面的なアセスメントに基づいた指導目標の設定と指導内容の選定がされていた。
- ・楽しそうな語りかけや得意な活動を最初に行うことで、導入がスムーズであった。
- ・端的な活動説明や肯定的な言葉かけにより、児童の意欲が高まっていた。
- ・活動毎の自己評価（満足フラワー等）により、鮮明な記憶を基にはっきり振り返ることができた。
- ・グラフや数値等を用いて活動の成果を視覚化することにより、児童と指導者が評価を共有できた。
- ・ICT機器を活用することにより、児童の弱みを補い、強みを生かした活動につながっていた。
- ・連絡ノートでは、コメントに加え、活動の様子も画像として添付することにより、支援方法や目的を所属級や保護者と共有することができた。



(3) 研究の成果とこれからの方向（指導助言を含む）

- ・児童は活動方法や用具の使い方を工夫できるまでに力を付けてきている。こうした仕方や用具を通級だけで使うのではなく教室でも共有できるよう、工夫していく必要がある。